

FOCUS

昭和31年2月20日第三種郵便物認可 平成16年8月24日発行 週刊新潮別冊

薬師丸ひろ子を選んだ「新しい家具」と「新しい彼」
日本の「ハワイ」に隠遁する「石立鉄男」のお相手
ヨン様がファンには見せなかった「舞台裏」と「抱擁写真」



8月24日号 330円

わが子を「ひきこもり」から防ぐための処方箋

ひきこもりの現場は凄惨である。誰もか思わず目をそけたくなるに違いない。しかし、はたしそれは他人事なのだろうか？保健所や精神保健福祉センターに寄せられる相談は年間1万4000件におよぶが、それでも氷山の一角にすぎない。ひきこもり問題に悩む家庭は、いまや全国で40万世帯を超えるといわれ、多くの場合、平和な家庭を突然襲う。そして、家族が右往左往するうちに、いつしか手がつけられなくなる。だが、あきらめるのは早い。親の心がけ次第で未然防衛が、少なくともキズを最小限に抑えることはできるはずだ。

左の写真、よく見ると障子の棧が無残にへし折られている。部屋の主の乱暴な



素行が垣間見えるようだが、万年床を上げてみると、そこにはカセットテープやCDなどが、碁盤の目のように整然と陳列されていた。電機系の専門学校を中退してこの部屋に引きこもった青年は毎晩卵を温める雛鳥よろしく、これらの宝物を守るように、その上に布団を敷いて寝ていたのである。写真が撮られた当時、21歳。両親は青年の暴力に手をこまねいて、だが、ふとんの下の秘密の花園には気づいていなかった。

「ひきこもった青少年の部屋はオタクっぽいことが非常に多い」というのは、精神科医の春日武彦氏の指摘である。

「人間は追い詰められると自分の世界を

狭めます。世の中全部を相手にしていたら太刀打ちできないから、局地戦に持ち込もうとするんです。つまり、ひきこもった子供にとっては自分の部屋が世界のすべて。そこでは自分が王様になって、全能感や支配欲を満たすのです」

下の写真のように、壁はおろか、水道の蛇口や空き瓶にいたるまで、此のタイル壁に独り禁断罪断りナク入ル者」等々と張り紙をしている男性も、やはり、支配欲。に取りつかれているよう。ただし、これらの男性は21歳の青年とは年季が違。すでに50歳を超えている。一流私大を卒業し、新聞社に就職したものの、まもなく部屋にひきこもり、現在にいたっているという。

トキワ精神保健事務所を経営する押川

剛さんのもとにはここ数年、ひきこもり患者の親からの依頼が引きも切らない。「子供部屋に居ない親たち」(光文社知恵の森文庫)などの著書がある押川さんは、こうした患者を説得し、病院に連れていく。移送サービス。を専門に行っている人物である。ここで紹介している写真も、その際に撮影されたものだ。しかし残念ながら、親が押川さんに泣きついたときには、子供はすでに堅固に築かれた根城にひきこもり、ちよつとやそこでは矯正できない場合がほとんどなのである。

子を持つ親にとって、わが子がひとり部屋にこもり続けるなど、想像するだけでも恐ろしいが、押川さんの数百回にもおよぶ移送の経験によれば、ひきこもる

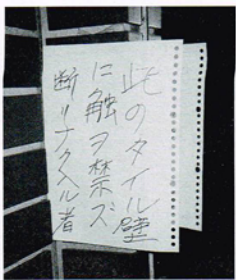
子供やその家庭には、一定の傾向がみられるという。それを仔細に検討すれば、きつと処方箋が見つかるに違いない。

母親の浮気

「早熟」――押川さんによればそれが、ひきこもる子供に共通する、ひとつの典型的なキーワードだという。

「私が相談を受けた中には、学校の成績はよく、一方、性的な知識もすくなく豊富だったという子供が多い。小学校低学年がコンビニなどでエロ本を立ち見しているも親は発見しにくい。最近では、子供がコンピュータや携帯でエロ画像を見て、例がすごく多いんです。親はほとんど気づいていない。そうやって性的な情報に接した子供が、4年生くらいになると生理や精通など第二次性徴を迎え、ほとんど例外なく、視点を親のセックスに向けてくるんです」

そういう子供は親の寝室を隔々まで探してソファやベッドを見つて、夜になれば両親のセックスに聞き耳を立てるが、それだけでは動かない。蓄えた性的知識によ



自分の物に触れられたくない気持ちが強



って免状ができていたからだ。むしろ、問題はその先にあるのだという。

「セックスをしている両親が、子供から見て疑問をはさむ余地がない夫婦関係にあれば、思春期は無事通過できます。ところが、お父さんがいないところでは悪口ばかり言っているお母さんが、夜になると、いっしょにセックスしているとなると、子供が受けるショックは大きい。学生時代に素敵な男性がいて結婚しようとしていたの、などと過去の恋愛話を子供にやたらと話すお母さんもありますが、これも子供には重いですね」

こうして、両親の夫婦関係に子供が少しでも首をひねり出ると、従順で成績もよかつた子が急に言うことをきかなくなるというのだ。その顕著な例は浮気だろう。実際、押川さんは、

「一親の浮気が原因で子供がひきこもるケースが最も多い」と言い切るのである。わけでも、母親の浮気が引き金になることが圧倒的に多いのだという。

「お母さんがテレク通いをしたり、パソコンでチャットをしたりすると、子供はすぐに感づきます。なにしろ、子供の方がパソコンに通じているから、チャットの履歴などはすぐに見られてしまう。そうすると、子供は突然、学校に行かなくなります。それまで周りからいい子といわれていた子が、家から外に出なくなる。ひきこもりの第一歩です」

そこで母親が態度を改めることができるならいい。ところが――

「子供はお母さんの浮気をお父さんに言いつけられません。ご飯を作って、お小遣いをくれるのはお母さんですから。母親は夫に知られたら困るし、子供はお母



さんから色々なものを供給してもらう必要がある。そこで子供と母親の共生関係が生まれます。言ってみれば、口止めの対価として子供のひきこもりを容認する母親が多いんです」

その結果、母親はひきこもりの原因を知っているけれども、父親にはさっぱりわからない、というケースが少なくないというから、なんとも恐ろしい。

「それに比べれば、学校でいじめられたのが原因で家にひきこもろうとした場合など、原因がはっきりしているの、それほど心配することはないのです」(同)

こうして見てくると、早熟な子がひきこもりやすいにせよ、そればかりが原因とは言い切れそうにない。結局、両親の姿勢が、子供をあらゆる方向に導いているのではないだろうか。前出の精神科医、春日武彦氏はこう説明する。

「浮気は、子供からみてアンフェアなのが問題です。こうして親に一貫性がないと気づくと、子供は裏切られたと思うわけです。親が子供を不平不満の聞き役にするのもしや。子供は母親のほやきを一生懸命聞きますが、結局、どうにもならないことに気づく。そうするとやり場のない怒りと無力感だけが残るのです」

ところで、押川さんはひきこもりやすい子供のキーワードとして、もうひとつ「いい子」をあげた。そういわれた子供が、学校の成績や受験の失敗がもとでひきこもる例も少なくないという。

「ひきこもりが深刻化する家庭は、総じて父親の社会的地位が高い。子供がらみて、少しぐらいの反抗では父親の牙城が崩せないときに、子供はひきこもり作戦に出るわけです」

と、押川さんは言うが、過度な期待を

かける親のゆとりのなさゆえに追い込まれるという点で、根は同じだろう。

2 週間以上休むと危ない

大人の罪深さはついでに認めるとして、現に目の前にいる子供にひきこりの兆候がないかどうかチェックするにはどうすればいいのだろうか。

右の写真は、もう40代になる女性の部屋である。2匹の犬を性的な感情に使いながら、十数年にわたってここにひきこりも続けていたという。ちなみに、この女性も父親が短大教授というインテリ家庭に育っているが、こうなる前に兆候を察知し、わが子をひきこりから未然に防げなかったのか。

ここで、ひきこりにはどんな前兆があるのか押川さんに解説してもらおう。「まず、不登校が突然始まります。夏休みや冬休みなど長期の休みの後が多いです。最初、子供はお腹が痛いといって学校を休み、次に、病気が治っているのに具合が悪いと言いつつ。そうして1日2日休むはずが、1カ月、2カ月と続いていくのです。正当な理由がないのに2週間以上休んで休むようになると、危険な状態です。学校に行けという親に暴力をふるい始めることもありです」

付け加えれば、親と本人との関係だけ



テーブルの上にはなぜか段ボールが立てられて……



裏に回るとラジカセやCDが電波から守られていた

でなく、教師や友達が訪ねてきても頑なに部屋から出なくなると危険な信号だ、という別の専門家の指摘もある。こうした子供の部屋を覗くと、実年齢にそぐわない空気を感ずるそう。たとえば異常な収納。部屋が不自然なまでに整然としたり、ある一定の対象に異常な収集が見えたりする。冒頭で紹介したケースもそれに当てはまるだろう。押川さんの話を続ける。

「そのうち親の作ったものを食べなくなる。昼夜が逆転し、深夜にコンビニに弁当を買に行ったり、母親をマクドナルドに行かせたりするようになります。次に、お風呂に入らなくなる。しまいには部屋から一歩も出なくなつて、幻聴や幻視も起きるようになり、ひとり笑いました」

「親の言うことを虚々として聞いてみよう。裏で口実ができてシメシメというわけ。そうした親は精神科医に相談にいきます。不思議なほど熱心でなく、子供が治つてしまふと逃げ場がなくなつてしまふからだと思います」

一方、親が精神的なゆとりを持っていれば、子供に過大な夢を託したり、子供を友だちと勘違いして愚痴をこぼしたりすることもなくなるだろう。

「ひきこりという本人をターゲットにすることが多いですが、むしろ家族をケアしていくことが大切なんです」(同)



りすることが増えるんです」

押川さんのところには、ここまで進んでから依頼が来るのが大半で、最初の兆候が表れてから数年を経ている場合が多いという。たとえば左の写真。幻聴が多くなった挙句に、電波の存在が気になりだし、段ボールを立てて大切なラジカセやCDを電波から守っている。18歳の少年の部屋である。

親とこじれた子供の常套手段といえ、家を出ることだろう。普通に考えればそうだが、ところが、ひきこりの子供にそれができないのは「親の期待を裏切った」という歪んだ罪悪感の表れ」というのが春日氏の見方である。最後に、この医師の声をもう少し聞いてみよう。



好きなCDの上に石を置き、想いを閉じ込めている